



しばた台輪

しばた台輪は、享保11年（1726年）、時の新発田藩主「溝口直温」公が、諏訪神社の祭礼をよりにぎわいのあるものにするため、『飾り人形の屋台を出すよう』とのお触れが出された事を起源としているといわれております。

以来約三百年にわたり脈々と引継がれております。

もともと、台輪は神輿の露払いであり、昭和12・3年頃までは「神輿渡御の町廻り」が行われておりました。

年代により幾多の説がありますが、昭和初期の頃の「神輿渡御の町廻り」はどのようなものだったのでしょうか？

古老からの聞き取り等によれば、概ね以下のようです。

- ① 職人町 組頭4人が麻袴^{あさかみしほ}を着用し先駆
- ② 中町 傘鉦（明治27年（1894年）に焼失）
- ③ 上町 本台輪 「1番」と書いた額面建^{がくめんたて}の纏^{まと}並びに紅白の鳥毛^{とりげ}、金幣^{きんぺい}の伊達道具

額面建の纏：竿（さお）の先に額面をつけ、その下に馬簾（ばれん）を垂らしたものを。

鳥毛：指物（さしもの）の竿の先や長槍の鞘（さや）の先を羽毛で飾ったもので、大名行列の先頭でこれを振って威勢を示したと言われている。（図1）

金幣：神殿等の前に飾る
（図2）



（図2）



（図1）

- ④ 下町 本台輪 新発田藩中随一の名筆家、尾本籠淵の書になる神会の建額纏、伊達道具
- ⑤ 四之町 本台輪 「降福（又は降神）」と書いた額面纏、黒鳥毛の伊達道具
- ⑥ 三之町 本台輪 六盧内藤弘の配所による「鎮守正一位諏訪明神」の額面纏、藩公から配慮された五階菱の伊達道具
- ⑦ 両町 本台輪 緋羅紗^{ひらしゃ}の伊達道具、額面纏
緋羅紗：赤い羅紗（起毛させた厚地の毛織物）。当時ではかなりオシャレなもの
- ⑧ 泉町 本台輪（諏訪前を含む） 昭和3年本台輪となる
- ⑨ 上鉄砲町 本台輪（旭町、清水谷を含む） 現在は使われていません。
- ⑩ 職人町 「職人町」と書いた額面纏、御先箱2連、兎の投槍12本、大小鳥毛12本、碁石鳥毛2本、その他槍、差物など藩公から拝領した126本で、妙技を演じながら行進

- ⑪ **大神楽** 獅子神楽、神楽道具
- ⑫ **真神束** 囃方が6名乗車し、囃子を演ずる
- ⑬ **神輿** はらえぬき 袂麻2人、しんくわ 神官、しんば 神馬、まじ 巫女、ごしん 御神刀、ごきう 御弓、ずいじん 隨身2人、はうてい 白丁16人で神輿を担ぐ

(図3)
 袂麻：神社では祭場・神饌・祭具・神職・参列者等を袂え清めるのに用いられる
 隨身：平安時代以降、貴人の外出のとき、警衛と威儀を兼ねて勅宣によってつけられた近衛府の官人
 白丁：律令制で、無位無官の良民。口分田を支給されて租を納め課税を負担する者

- ⑭ **斎主**、**鉾箱**、**介添神官**

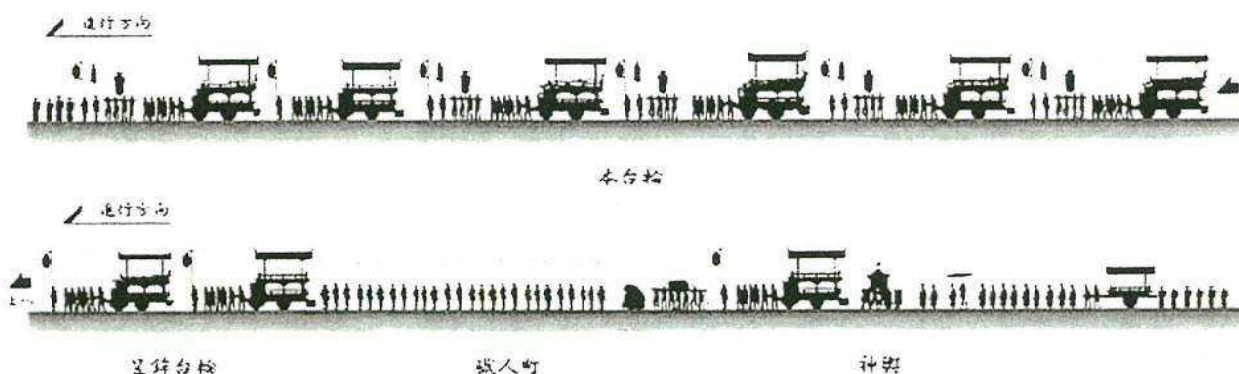
斎主：神をまつる人。神事をつかさどる人。神主



(図3)

これらを総合すると下記のような行列になります。(資料提供 下町(わ組))

昭和12・3年までおこなわれていた「神輿渡御の町廻り」



8月27日に諏訪前広場に集合し、町廻りを行い同日中に神輿と共に神社に帰り境内に飾られます。そして29日夕刻から各町内へ帰る、いわゆる「帰り台輪」が行われます。

神輿は町廻りの際、各町内の御仮舎(御旅所)で休むのですが、そこでは清砂を敷き、青竹にメ縄が張られ、町内大世話方、年番、オモダチの列席のもとに祝詞があげられ、上町・中町・下町・四之町・三之町・両町に神輿の町内持ちがあり、町内の参拝が終わるとその町内の若連中が担いで自町内をワッショイワッショイの掛け声勇ましく廻ったとのこと。

泉町(諏訪前含む)、上鉄砲町(旭町、清水谷含む)、東町は宮元ということで、神輿の持ち回りはなかったのですが明治40年頃から町内持ちが許され、また祭典連合会が発足してから、下鉄砲町の若い衆が担ぐようになったとの事です。

いずれも門外不出で、詳細についての記録が乏しく、また、飾られていた伊達道具等も昭和32・3年頃から交通規制等で格納されたままとなっていました。

現在は、上町・四之町・三之町は修復され各町内に大切に保管され、下町・両町は未だ修復されていない状態です。中町の伊達道具は現在泉町にゆずり渡されております。

西王母

中国の古代神話上の女神。西方の崑崙山（こんろんさん）に住み、山海經（せんがいきょう）では半人半獣、のちに美化されて描かれるようになった。不老長寿をもって知られ、周の穆王（ぼくおう）が西征途上に会い、また、漢の武帝が不老不死の仙桃を授かったとされています。

布袋

中国、唐末の禪僧。名は契此（かいし）。半裸で太鼓腹を出し、日用品を入れた袋と杖（つえ）を持ち、市中を歩いて吉凶や天気を占ったといわれており、弥勒（みろく）の化身ともいわれ、日本では七福神の一人です。

下町（わ組）



鳳凰に桐

長さ	5.502 m
屋根幅	2.785 m
高さ	3.830 m
重量	1.559 t



西王母と唐子 2体

四之町（し組）



竜

長さ	5.320 m
屋根幅	2.854 m
高さ	4.080 m
重量	1.798 t



神功皇后と武内宿禰

神功皇后

記紀に伝えられる仲哀天皇の皇后。名は氣長足姫尊（おきながたらしひめのみこと）。仲哀天皇の没後、懐妊のまま朝鮮半島に遠征し、帰国後に応神天皇を出産したといわれています。

武内宿禰

大和朝廷の初期に活躍したという伝説上の人物。記紀によれば第8代孝元天皇の曾孫で、景行・成務・仲哀・応神・仁徳の5朝に仕え、大臣となり、神功皇后を助けて新羅（しらぎ）出兵などに功績があったといわれています。葛城（かつらぎ）・巨勢（こせ）・平群（へぐり）・蘇我（そが）・紀氏などの祖とされています。

上町（一番組）



鳳凰に桐

長さ	5.375 m
屋根幅	2.796 m
高さ	3.920 m
重量	1.477 t



布袋と唐子 2体

本台輪は御殿風二階造りで、一階は囃方が入り、二階部には人形が飾られています。本台輪は見送り、勾欄、蛇腹、廂部部分は彫刻が施され、すべてが朱塗り、金箔、また金具の美々しく豪華なつくりとなっています。

これらのうち、二階部の「人形」はもとより、背面の「見送り」、一階部上部の「蛇腹」、四隅を守る「木鼻」が町内により異なります。

ここには「見送り」と「人形」を掲載しました。

泉町（泉組）



三羽鶴

長さ	5.357 m
屋根幅	2.852 m
高さ	3.893 m
重量	1.630 t



老子と父母（二十四孝）

漢文帝と薄太后

漢文帝は漢の高祖の皇子で、母の薄太后に孝行を尽くし、食事の際は自らが試食するほどでした。このため兄弟も沢山いたのですが、文帝ほど慈愛と道義を実践する皇帝は居なかったそうです。

このため皇帝に推戴し漢の文帝といわれるようになったそうです。

孝行とは誰でも知っていますが実際に行う事は難しいです。皇帝の身分で孝行を行った事は神の如き志であるといわれています。

三之町（い組）



波に亀

長さ	5.412 m
屋根幅	2.862 m
高さ	3.911 m
重量	1.566 t



漢文帝と薄太后 他1体（二十四孝）

両町（両町）



牡丹に唐獅子

長さ	5.362 m
屋根幅	2.850 m
高さ	3.901 m
重量	1.560 t



義経と従者

老子

両親に仕えた人であり、70歳の年を取っても、自分が若く美しくない所を見せると、息子もこんな歳になって親自身が年寄りになったと悲しむと思い、子供の着物を着て子供の格好をし、子供のように遊び、子供のように愚かな振る舞いをしたそうです。

義経

義経はご承知のとおり、頼朝と常盤の九男として生れ、悲運の生涯を過ごした。

焼失前は五福人

～お囃子～

台輪は「頭取」^{とうどり}「副頭取」^{ふくとうどり}、「小頭」^{こがしら}、「取締」^{とりしまり}、「曳き子」^{ひきこ}の役割分担の他に、台輪の1階部分でお囃子を奏でる楽隊が居り、「お囃子方」^{はやしがた}と呼ばれております。



この「お囃子方」^{はやしがた}は概ね しめ太鼓 二、横笛 二～三、鼓 一、三味線 一～二で構成され、町廻りを終え境内に飾られるまでは『本調子』^{ほんちようし}とよばれる曲が奏でられ祝儀歌^{しめぎうた}が歌われます。

また、町内によっては、地元の神社の境内だけで詠われる曲や、毎年祝儀歌の内容を替えるなど、それぞれに違いがあります。



これらのお囃子は、京都から伝来したものとされており、しめ太鼓のしぐさ、掛声等に、その片鱗を見ることができます。



神事が行われている間は本調子を奏でますが、29日夕から夜にかけて各町内に戻る帰り台輪には、急調子のお囃子と「新発田おけさ」が歌われます。

台輪門と呼ばれる山門左側の門をくぐると、お囃子は急調子へと変わり、役員を始め、曳き子の若い衆の士気も最高潮へとお囃子が導きます。

この「お囃子方」のお囃子があってこそ、あの勇壮な、各町内の意気を鼓舞し、ぶつかりあう帰り台輪が生れます。



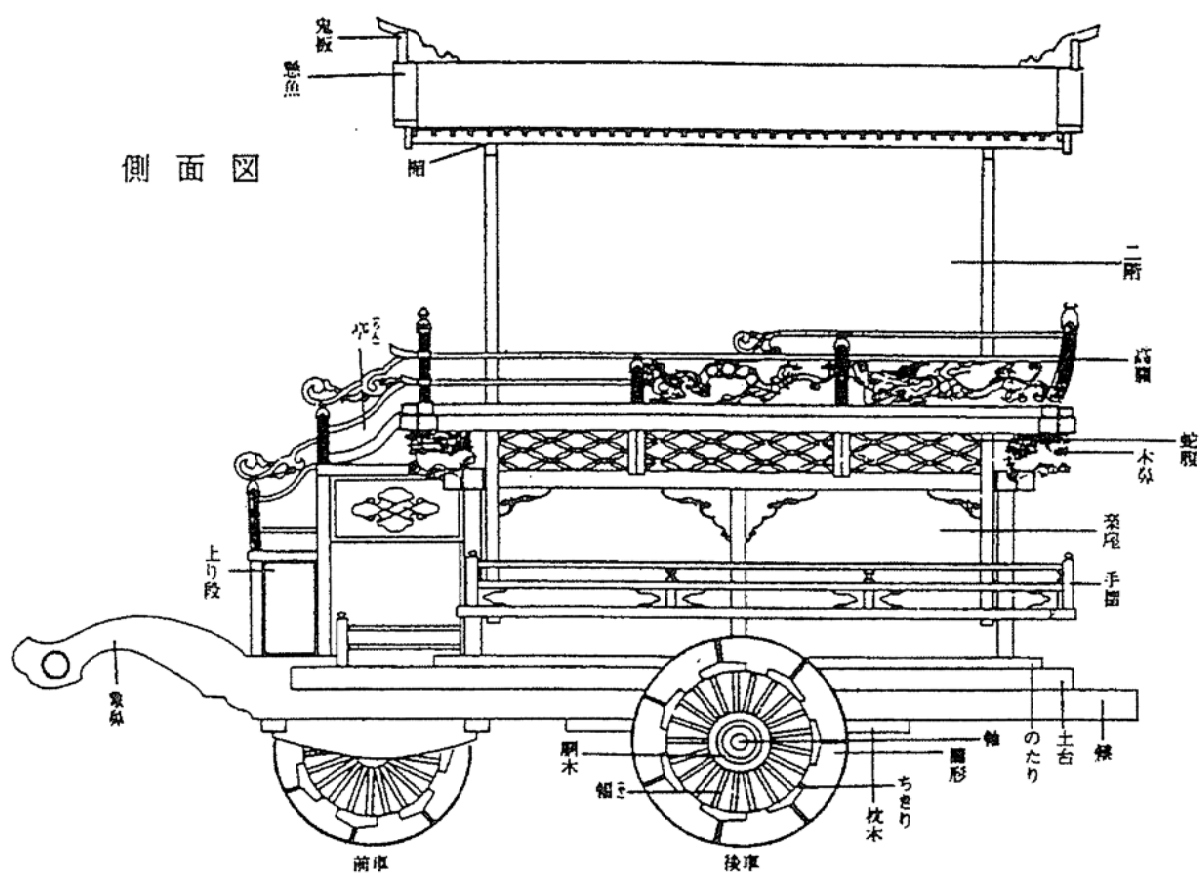
上町 帰り台輪祝歌

ハアーエ
お前百まで わしゃ九十九まで
共に白髪の生えるまで

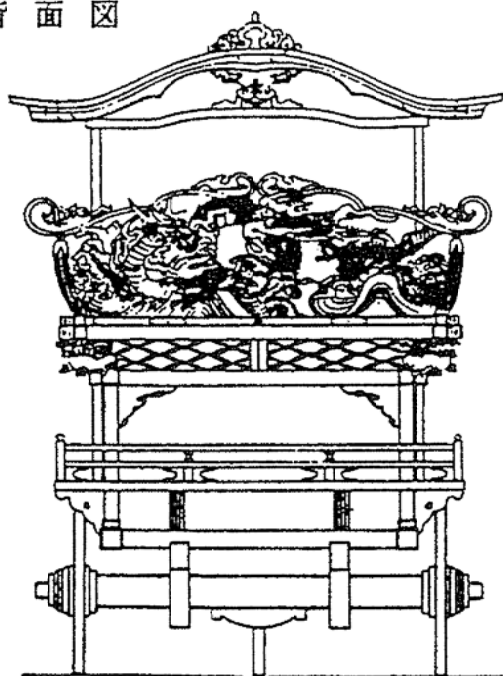
ハアーエ
上町台輪の勢い 見やれ
繁昌の そのままに

ハアーエ
揃たよ 上町の若い衆
稲の出穂より 尚そろた

上町の帰り台輪で詠われる
り台輪の祝歌の歌詞です。
上町にはその他、沢山あるそ
うですが、現在ではこの歌が、
主に詠われているそうです。



背面図



正面図

